

talk! talk! talk! 漫画家・中川いさみさん



漫画家

中川いさみさん

「クマのプー太郎」の大ヒットにより漫画家・中川いさみさんの世界を知った人も多いのではないだろうか。ほのぼのとした世界観とそこに現れる摩訶不思議なキャラクター。そして彼らが放つ特有のギャグに魅了され続けているファンも多い。今回は学生の頃から始めたという写真の話からギャグ漫画の"笑い"についてまで、中川さんならではの視点でたっぷりとお話いただいた。

プロフィール

なかがわ・いさみ。1962年、神奈川県生まれ。学生時代から漫画を描き始める。1990年に、ビックコミックスピリッツ（小学館）に連載を開始したギャグマンガ「クマのプー太郎」が大ヒットする。特異なキャラクターが織りなす無類のギャグと摩訶不思議な世界観で数多くのファンを魅了する。これまでの代表作に「大人袋」「カラブキ」（角川書店）「ボジャリカ」（小学館）「学級王子」（ポプラ社）など。その他、挿し絵などのイラストを始め、「ぼくはゆっくり楽しみたい。」（角川書店）などの絵本も上梓している。2004年1月に、絵本から生まれたキャラクターをコミック化した「ボグリ」（角川書店）を発売している。

カメラへの興味は暗室から「写真を撮るのはついでみたいな感じでした」

写真を撮めたのはいつ頃からですか？

本格的にカメラを買って撮り始めたのは、高校生のときに写真部に入ってからですね。

部活動というと、全員で撮影会に行ったりされていたんですか？

いや、そういう部活のノリはまったくなかったですよ。部活動といってもいいかげんなものだったので、集まったりはしなかったですね。部活動に入っていると暗室が自由に使えるんですよ。それが目的でした。

暗室の機材や用品がタダで使えるという。

そうです。もともと兄がカメラ好きで、家の押し入れや風呂場を閉め切って焼いていたんです。その影響でカメラを始めましたが、もともと撮る方に興味はなくて、暗室で印画紙を薬品につけてゆらしてっていう、あの作業が面白そうだなというのがあったんです。だから高校生のときも、撮る方についてはついでみたいな感じでしたね。暗室を使うためには、何か撮らないとなあと。

撮影することはあまり重要ではなかったんですね。

そうです。暗室作業がやりたいがために、何か撮っておいたほうがいよなって思って撮影しに行っていました。

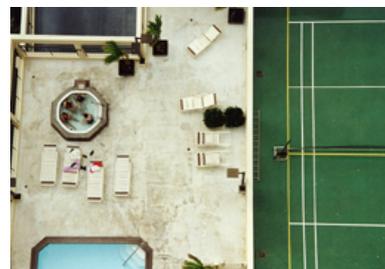
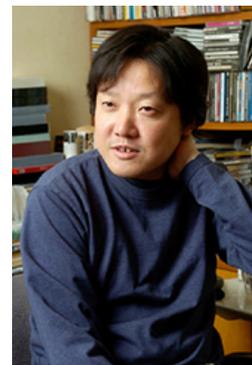
友達が鉄道好きだったので一緒にいって撮ったり、あとイベントごとだったり.....横浜に住んでいたんですが、クイーンエリザベス2世号が港に来たときに撮りに行きましたね。

それからずっと写真を撮り続けてこられたんですか？

いや、そのあとしばらくの間、写真を撮るのをやめたんです。何か嫌だなと思ってしまって。写真を撮るのが偉そうというか、恥ずかしいというか.....

恥ずかしい？

うーん、何でしょうかね？結局、撮りたいものが見つからなかったんです。写真を撮ることに限界を感じたんでしょうね。鉄道を撮っていたけど、別に鉄道好きではなかったですし、人を撮るっていうのも、知り合いだったらいいけど、知らない人に声をかけて撮るっていうのもちょっと違うなと思ったし、何を撮っていいのかよく分からなかったんですよ。だからよけいに、写真を撮ることや、「どうですか？良い写真でしょ」って見える感じが大好きなことになって、恥ずかしく思えたのかもしれないですね。



真上からの撮影が、デザイン的な印象を与えている。

風景よりも色や形ものをクローズアップして撮影

現在はよく写真を撮っていらっしゃるそうですね。

ええ、そうですね。漫画家仲間写真好きが集まって、写真の会を作ったんですよ。他にも相原コージ、吉田戦車、山本直樹とか、メンバーが凄いですよね。せっかくだから撮った写真を本にしようって思って、定期的集まってテーマを決めて撮影会をしたりしていたんです。結局、本は企画倒れになってしまったんですけどね。

どういったテーマで撮影されていたんですか？

テーマというか、撮影する町を決めるんです。川越とか、王子とか、ちょっと味のある雰囲気のある町を選んで。その町に集まって、集合時間を決めて各自撮影して、また集まる。今は1時間ぐらいでプリントできるじゃないですか。みんなでお茶でもしながらを待って、出来た写真を見せ合おうです。同じ町でもみんな撮るものが全然違うから面白かったですよ。たとえば、相原コージは凄く正統派で、写真雑誌に投稿されているような写真といえますか、風景や町並みを撮っているんですが、僕は逆に、凄くひねくれた感じですね。

ひねくれた感じというのは？

色とか形が気になってしまうんですね。風景を撮るよりも、ひとつのものをクローズアップしたり、一部分を切り取って写しています。わりとデザイン的というかね。その一枚だけ見ても、どこを撮ったとか何を撮ったとかはよくわからない、そういう写真を撮るのが好きなんです。

あとは、こういった、おかしな奴を撮ってみたい。

これは.....公園のオブジェでしょうか（笑）。かわいいものとして作られているはずなのに、写真で見せられるとちょっと無気味でおかしな感じがしますね。

変ですよね。あとはこの、もの凄くアバウトにタコが分解されている様もおかしいですよね。微妙に値段が違うんですよ（笑）。タクシーが並んでいる写真も、機械的でいいなと思って撮ったんですけど、よく見たら標示が「3列」ではなくて、「ヨタリ」と読めます。

（笑）。こういった、いわゆる"おかしいと感ずるもの"も意図的に撮っていらっしゃるのですか？

そうですね、人に写真を見せて笑わせようというのはあるんです。写真を見せられて、この構図がどうで露出がどうでと言われても、つかれちゃうんですよ。それよりは、見ていて面白いという方がいいじゃないですか。でも、別に笑わせられるものばかりを探して撮っているわけではないですよ。見つけたら撮るぐらいなもので、そればかり狙ってもあまり面白くないですからね。



「変な奴」公園や道端で見つけた変な奴ら。



市場で遭遇した解体後の巨大タコ。



以前渋谷にあったというタクシー乗り場。

持っていてうれしいカメラ お気に入りの「ニコン28Ti」

写真の会以外に、個人で撮影に行くことはあるのですか？

写真の会では本が企画倒れになったあたりから、あまり活動しなくなっちゃったんですよ。だから撮影に行くことはないですね。今は旅行とか、どこか出かけるときに持って行って撮ったり、あと小さなデジカメをいつもポケットに入れています。このコンパクトカメラ（ニコン28Ti）でもよく撮っていますよ。これ、いいですよ。

1994年に発売された高級コンパクトカメラですね。

35mmレンズの35Tiが先に発売されていて、いいなあと思って28Tiが出たときに買ったんです。小さいし、設定ボタンが使いやすいんですよ。今のコンパクトカメラだと、ひとつのダイヤルで切り替えができたりしますが、これは全部パラバタについているんですよ。特に、スピードライトのオン、オフを切り替えるボタンがスライド式になっていて、横についているのが凄く使いやすいですね。

表示がデジタルではなくアナログなんですよ。

そう、ここが一番格好良いと思って買ったんです。表示をアナログにする必要はあったのかって感じですけど（笑）、メカっぽいや、あえてアナログっていうのがなかなかシャレてますよね。

僕、コンパクトカメラの望遠レンズがあまり好きではないんですよ。ギューンってレンズが伸びるのが嫌で。これは単体で出てくるだけだから、それも好きなんです。全体の形も四角っぽくて、余計なでっぱりがないのもいい。見た目も好きなので、持っていてうれしい、という感じのカメラですね。



上部についているのがアナログの表示。
左手の人差し指あたりについているのが
スライド式のスピードライト切り替えボタンだ。

まとめてタイトルをつけることで 写真の新たな面白さを発見

写真はどのように整理されているんですか？

撮った中から似た写真や、まとまりそうな写真を探して、アルバムに並べて、ものによってはタイトルを付けています。写真を撮ってからそこまでまとめるのが楽しいんです。こういう形で再編集すると、写真が違う意味を持ったり違うものに見えたりするのが面白いんですよ。

違うものに見えるというのは？

たとえば、手ぶれしてしまった写真は、1枚で見たら失敗ですよ。でも、ブレた写真だけを集めてみたら、それで意味が出てくるんじゃないかなって。1枚で良いとか悪いとかじゃなくて、まとめて違った面白さを見つけてみるんです。

たしかに、実際の被写体の印象とは、まったくかけ離れた印象の写真になっている気がします。

デュシャンの「泉」という作品がありますよね。便器だということは知っていましたが、最初、どこが便器なのかわからなかったんですよ。よく見たら、ただ縦になっている便器を横にしただけなんです。それに凄くびっくりしたんです。普通に見ていたものをちょっと角度を変えて見ただけで、全然違うものになるというのがすごく面白いと思ったんです。写真も同じように、視点を変えることができるものだと思うんです。コピー機をいくら見てもコピー機にしか見えなくても、写真で一部だけを撮って見ると、これはいったいなんだ？ってまったく違うものに見えたりする。

ものを見方を変えてくれる。

そうですね。そのものの意味をはぎとって、ただ単純な形にしてくれるというかね。それが写真の特性であり、一番面白い所だと思います。

いつも見ているものでも、見ているようで実は細かいところまでは見れていないんですよ。だから写真で切り取るとなんだかわからなくなってしまし、違うものに見えるんです。それがすごく刺激的というか、新鮮ですよ。



「並んでる」



「並んでる」



「子供のかたまり、おばさんのかたまり」



「子供のかたまり、おばさんのかたまり」

はっきりとしたオチをつけない 余韻を残すギャグ漫画

ギャグ漫画を描こうと思ったのはなぜですか？

ずっと読んでいたというのが一番の理由です。赤塚不二夫さんの漫画とか、『がきデカ』とか、そういうギャグ漫画で育った世代ですからね。

漫画というよりもギャグが描きたいんです。ちゃんとした漫画が描けないというのはあるんですけど（笑）、ギャグですね。紙の上でギャグがやりたい。

先生の作品は、はっきりしたオチで笑わせるというよりは、台詞やシチュエーション、キャラクターなどのおかしさに特徴があるように感じます。

そうですか？ まあ、オチを四コマ漫画の四コマ目に持ってくることは少ないかもしれませんがね。

僕の場合、一コマ目で終わってしまうときもありますからね。一コマ目が全てであとの三コマはつけたただけとか、昔の作品でよくやりましたね。一コマ目が「ロンドンバスが好きかい？」という台詞で始まるのがあるんですけど、その作品は一コマ目のその台詞が言いたかっただけでですね。あとの三コマは適当（笑）。

（笑）ははっきりしたオチがなくても、なぜか笑ってしまうものが多いですね。

漫画って、わりとはっきりしたオチがあるとそこで終わってしまうんですよ。ああ、そういうことなのねって。ダジャレオチだったら、読んだ人もこれはダジャレなんだなって思う。でも、そのダジャレがないのにおかしかったら、これはいったいなんだろうって考えると思っんですよね。

すこし余韻が残るような？

そう、余韻を残したいというのはありますね。だから、三コマ目に落として、四コマ目がくっついているという形はよくやりますよ。

でも、わかりやすいオチがあっても、そのオチの部分で笑っているわけではなくて、実はもっと他のよくわからない要素があって笑っているんだと思うんです。そのよくわからない部分を見せたいがために、はっきりとしたオチをはずすということをしているのかもしれない。

それで、なぜか笑ってしまうという状態になるんですね。

でも、僕も笑いが何かと言われるとよくわかっていないと思いますよ。もちろん読んだ人を笑わせたいと思って描いてはいるんですが、基本的に僕が面白ければいいかなってところもあるんで.....僕が面白いと思っている部分というのは、実はあまり伝わってないかもしれないですね。



「眠る」



「眠る」

全ての基準は「恥ずかしさ」にあり!?

今回写真を拝見させていただいて、中川いさみワールドと言いますか、漫画に感じられる中川さんならではのカラーが写真にも現れているように思いました。

やっぱり今でも"良い写真でしょ"っていう見せ方が恥ずかしいんですよ。だから、ネタとして面白いとか、2枚並べると面白いとか、どこか見せるポイントがないとダメなんです。1枚の写真を飾って、いかにも"作品撮りました"っていうのはやっぱり嫌だなあと。

写真には、作品という意識はないんですか？

作品ですけど、僕が撮っているのは芸術作品ではないですよ。

結局、今も撮りたいものがないんですよ。写真が好きなのに撮るものがない、おまけに芸術写真ってものは撮りたくない、だったらどうい写真撮るのか考えたときに、こういう写真を撮るようになったんでしょね。ネタだったりテーマでくくってみると面白い、そういう軽い感じでいいのかなと思っています。

こういう言い方も失礼かもしれませんが、漫画も写真も、どちらかというと軽い、力をゆるめた印象を受けます。

そうですね。仕事にしても何にしても、ちゃんとやることに恥ずかしさがありますね。あんまり「どうだ！」って感じがしてもね……。やっぱり僕にとって恥ずかしい、恥ずかしくなくというのがひとつの基準なのかもしれないですね。



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.